

ポイント

英国のタウン・デザインと
米国のアーバンデザイン、
アーバンデザインの近年の動き

Ⅲ アーバンデザインの取り組み

0. タウン・デザインへの萌芽

- カミロ・ジッテ (Camillo Sitte) (オーストリア)

“Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen” 1889 『芸術的原理に基づく都市計画』
→ (SD 選書 175 「広場の造形」)

大規模な伝統的公共空間 (広場、道、都市の構成) を分析し、その美しさの理由を探し、配置、
プロポーション、スケールなどの原則を導き出す (適切なスケールで囲い込まれた空間の重視)

中世とルネサンス都市の美 都市計画の技術⇔美的価値

↑ 影響

J・シュティベン (J. Stübben) “Städtebau” 1880

強制的な大規模再開発 (パリ) のオスマンへの反発から古い都市が拡大しながら、
注意深く保全されるべきとする主張

雑誌 “Der Städtebau” 1904 年刊行 (ジッテは発刊の努力をしたが 1903 年死亡)

c f. Städtebau (独・都市計画)

1. 英国の “タウン・デザイン” 派 = 街並み (タウンスケープ) への配慮のはじまり

- 1) フレデリック・ギバード (Frederick Gibberd)

“Town Design” 1953 (鹿島出版会「タウン・デザイン」)

タウン・デザインに関する (新開発を含めて) 要素を 690 事例から考察している (資料集)

『デザインは、建築や景観、道路等、各部門のデザインを包含するものであるが、個々の部門が一体に融合し、‘都市景観’として新しい表現をつくりあげるものである。この本で最初にとりあげるのは、この景観の構成であり、とくに視覚上の諸性質についてである。強くいたいのは、都市デザインがひとつの部門として存在するということであるが、都市の様相は都市デザインのなすべき範疇を超えて展開しているので、都市の役割とか社会的あるいは科学技術的諸問題についても、都市の美的構成という面からの十分な検討が加えられている。この本では、建築、ランドスケープ、道路デザイン等の部門についても言及しているが、都市景観に関わる部分についてしかふれていない。都市景観は、これらの部門が専門分化した技術となってしまってから質が低下したのである。各建築物の形について考察を行ったのは、都市景観の構成が建造物によるところが大きいからである。』

- 2) ゴードン・カレン (Gordon Cullen)

“The Concise TOWNSCAPE” 1961 (SD 選書 98 「都市の景観」) 1947 年から Architecture Review 誌に連載
中世の街並みに隠れた空間、ひそんだ骨格や基盤をスケッチにより引き出す (写真では映り過ぎる)
近代建築に応用することで伝統的な街並みのなかに近代建築を挿入/既存の都市空間の中からよい部分を取り出す

単体の建築の評価は建築作品/「ひとつの建物は建築だが、2つの建物は建築をしのぐ芸術 (タウンスケープ) である」/まわりとどのように関わったのが都市空間として重要

- 3) トマス・シャープ (Thomas Sharp)

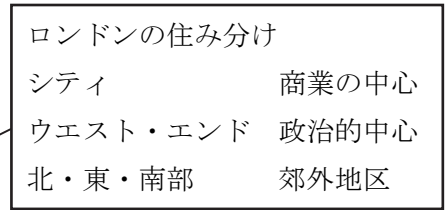
“Town and Townscape” 1968 (SD 選書 73 「タウンスケープ」)

どのような過程で町 (の中心部・Downtown) の物理的性格が構成されるかを検討するために、町の表情を観察・評価する。

どのように見えるか/空間の仕掛け/ランドマーク

c f. Oxford Replanned (1948) など

- 4) ケネス・ブラウン (Kenneth Brown)
 “West End :renewal of a metropolitan center” 1971
 現存する空間を生き生きさせる小さな技/改善策
 ロンドン・ウエストエンドの再開発



シティから移住した行政を担う役人や法律家が居住

2. 米国の“アーバンデザイン”

1960年代に“アーバンデザイン”が出現するまでにアメリカ合衆国で次のようなエポックがあった。

- 0) 1853年第1回ニューヨーク万国博覧会で「客用」エレベータが公開 (発明家イライシャ・オーティス)
 →はじめは見世物→1857年E・G・ホーワート社 (ニューヨーク) に納入をきっかけに普及
- 1) 1870年代 シカゴで高層建築物の建設が始まる。商業の中心がシカゴ市場からニューヨークに移り、マンハッタンに鉄骨造の (超) 高層建築が建ち並ぶようになる→均質な各階フロアの提供
- 2) 1893 (明治26)年 ミシガン湖畔を会場としたシカゴ・コロンブス世界博覧会が開催
 (コロンブスのアメリカ大陸発見400年記念)

マスターアーキテクト: ダニエル・H. バーナム

配置計画: F. L. オルムステッド、H. ゴッドマン

→フランス風アカデミックな古典主義 (ボザール建築、バロック式都市計画)

と対称的な軸線の組み合わせ



古代ギリシャ・ローマ、ルネサンス、イタリア、フランスなど各種の建築様式によって構成されたホワイト・シティの実現



当時の米国市民は自分たちの住む都市との違い (時代を感じさせる街並み、都市に適した公共空間のあり方) に驚き、これに習って都市を (バロック式で) 美しくすべきという運動を開始する
 ⇒ City Beautiful Movement (都市美運動)

- 3) 1915年新イキタブルビル (地上36階・165m) が建設され、周囲の建物への威圧、道路の採光が社会問題となる



1916年 ニューヨーク市でゾーニング条例が施行され

容積率、道路斜線制限が加えられるようになって

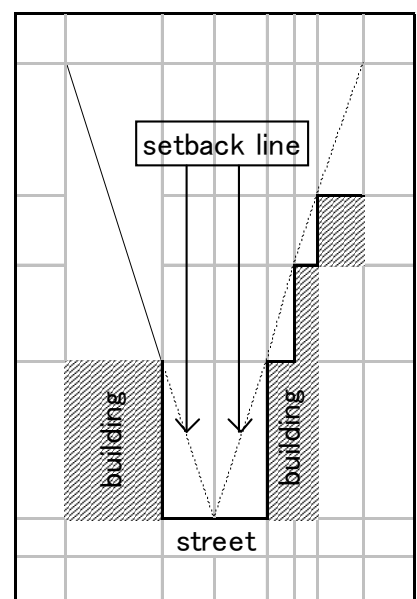
高層ビルの形態に変化が現れはじめた。

= 地上レベルのオープンスペースに囲まれた

搭状のオフィスビルによって密度を増加、

スラム撤去を志向 (1961年全面改訂)

セットバック形態の出現



- 4) 1922年フュー・フェリスによる「新しい建築」の発表＝セットバック・スカイスクレーパーの美的根拠を示す（セットバック・スカイスクレーパーに至る4段階）
- 5) 1929年10月24日 世界的経済恐慌はじまる ⇒ 都市開発の主体が民間投資から政府活動に
- 6) 1960年ケビン・リンチが「都市のイメージ」を発表
人々がもつイメージにより現状の都市像を理解する試み。現代都市の理解の手がかりとなった
-----（1960年代以降）
- 7) 1972年セントルイスのプリーツ・アイゴー公営住宅団地事件
ミノル・ヤマサキ*設計の団地でアメリカ建築家協会デザイン賞受賞作品（1950年代）
スラムクリアランスを目的として建設、従前の居住者が新団地に収容されたが、かつての気楽で親密な生活がなくなり、住民が徐々に減少。麻薬の売人など好ましくない住民が増加し、環境がますます悪化、結局ダイナマイトで破壊した。

※ Minoru Yamasaki (1912~1987) 米国現代建築家。ワシントン大学・ニューヨーク大学で建築を学び、1949年に自身で事務所を設立。近代的なデザインを得意とする。ワールド・トレード・センター（ニューヨーク）は代表作
- 8) 郊外住宅地の破綻 → ニューアーバニズムの勃興
- 9) 経済不況、湾岸戦争、9.11テロ

3. 米国のアーバンデザインの実践

米国で1960年代中頃に都市の病巣を手当てする公共政策として、都市全体のあるべき姿のトータルデザインとして「アーバンデザイン」の模索と実践が始まる

- ・フィラデルフィアのエドモンド・ベーコン (Edmund Bacon)
- ・サンフランシスコのアラン・ジェイコブス (Alain Jacobs)
- ・ニューヨークのジョナサン・バーネット (Jonathan Barnett)

米国大学のカリキュラムへの組み込み

1957年 ペルシルベニア大学シビックデザイン課程開設

1960年 ハーバード大学アーバンデザイン学科（大学院）創設

1971年 ニューヨーク市立大学大学院アーバンデザイン課程開設

→（バーネットの言葉）

アーバンデザインとは都市の成長・保存・変化に応じて、物的環境のデザイン上の方向づけを行うプロセスに対して広く認められた名称であり、それはまた保存建築物や新しく建設される建物と同様にランドスケープを、さらに都市のみならず田園地域をも含むものと理解されている



4. 20 世紀後半におこった都市の風景・景観・見栄えの類似性 (世界中の都市が似てくる)

類似性は主要な 4 つの要因により説明可能 … 全世界が画一化した原因

= 建築物、技術革新、都市計画、社会変化によってもたらされた同一感

- 1) 建築物—建築家の設計による／よらず、大量生産の如何を問わず、最も目立つ人間の造形物
=現代建築の美的原理となっている無装飾の角張った形態
- 2) 技術革新—鉄骨、商業用電力、自動車などのここ 100 年間での進展
=新しい建築形態や生活様式を可能とした
- 3) 都市計画—20 世紀初頭に開発されたこの技術は、都市の構成要素のレイアウトと配置を規定した
⇒他者から搾取される自分自身の劣悪な性向から自己を守り、ひいては健康や正義、
平等に支えられたユートピアを実現させるという意図もあった。
- 4) 社会変化—先進諸国の現代都市ではほとんどの人が文字を読み書きし、快適な住宅に住み、オフィスで頭脳労働に携わり、血縁よりも瞬時に伝わる電気通信システムによって結びついている
=郊外の消費者コミュニティ (郊外住宅地) や超高層オフィスの建ち並ぶ都心部の景観を形成



- 5) **国際主義**—思想や流行は国境で完全に区切られるわけではない。かつては遅い移動速度のために普及が限られており、たいていは既存の地域的伝統に適応しながらある地方から別の地方へと伝えられていった。そのため、地方の慣習や建築に根ざした地域的な多様性は大きかった。しかし、上記のような状況の中、新しい建築技術と高速通信によって地域的な適応の可能性が大幅に減少し、指導的な企業、建築家・都市計画家は世界各地に移動し、世界中どこでも通用するデザインを持ち込んだり借用するようになった。⇒ 類似 ⇒世界中どこに行っても同じ様相

5. 割れ窓理論 1982 年発表 「割れ窓理論による犯罪防止 監訳者あとがき」からの抜粋

「割れ窓理論」は米国ニューヨーク市の治安回復において大きな役割を果たしたと言われている。

割れ窓理論 (Broken Windows Theory) は、ケリング博士がウィルソン博士と共著で、「アトランティック・マンスリー」誌に発表したのが、1982 年当時は大きな注目を集めたわけではなかった。それまでの対策が、いわゆる犯罪原因論に基づいていたからである。

犯罪原因論は、犯罪者の異常な人格や劣悪な境遇に犯罪の原因を求め、それを取り除くことによって犯罪を防止しようとする立場である。しかしながら、犯罪原因論は犯罪増加に歯止めをかけることができなかった。そのため、犯罪の原因を究明することは困難であり、仮に原因を解明できても、それを除去するプログラムを開発することは一層困難であることが認識されるようになった。また、犯罪原因論は、犯罪者に焦点を合わせて、その異常な人格や劣悪な境遇を改善しようとするものなので、それにもとづく対策には被害者の視点が欠落していた。

こうして、欧米諸国では 1980 年代に犯罪原因論は大きく後退し、替わって**犯罪機会論**が台頭した。それは、被害者の視点から、犯罪の機会を与えないことによって犯罪を未然に防止しようとする立場である。犯罪原因論が、犯罪者は非犯罪者とはかなり違っており、その差異のために、ある人は罪を犯すが他の人は犯さないと考えるのとは対照的に、**犯罪機会論**は、犯罪者と非犯罪者との差異はほとんどなく、犯罪性が低い者でも犯罪機会があれば犯罪を実行し、犯罪性が高い者でも犯罪機会がなければ犯罪を実行しないと考える。この考え方にもとづいて、欧米諸国では、犯行に都合の悪い状況を作り出すことが犯罪対策の主流になった。

被害者の視点から、犯罪の機会を与えないように状況を変えるためには、犯罪者の標的については「抵抗性」を、犯行の場所については「領域性」と「監視性」を、それぞれ高める必要がある。抵抗性とは、犯罪者から加わる力を押し返そうとすることであり、ハード面の恒常性 (一定不変なこと) とソフト面の管理意識 (望ましい状態を維持しようと思うこと) からなる。領域性とは、犯罪者の力が及ばない範囲を明確にすることであり、ハード面の区画性 (区切られていること) とソフト面の縄張意識

(侵入は許さないと思うこと) からなる。監視性とは、犯罪者の行動を把握できることであり、ハード面の「無」死角性 (見通しのきかない場所がないこと) とソフト面の当事者意識 (自分自身の問題としてとらえること) からなる。

このうち、領域性と監視性のソフト面、すなわち、縄張意識と当事者意識を重視するのが割れ窓理論である (これに対して、領域性と監視性のハード面、すなわち、区画性と無死角性を重視するのが「防犯環境設計」と呼ばれる手法である)。「割れた窓ガラス」は、縄張意識と当事者意識が低い地域の象徴である。「割れた窓ガラス」が放置されているような地域では、縄張意識が感じられないので、犯罪者といえども警戒心を抱くことなく気軽に立ち入ることができ、さらに、当事者意識も感じられないので、犯罪者は「犯罪を実行しても見つからないだろう」「見つかっても通報されないだろう」「犯行は制止されないだろう」と思い、安心して犯罪に着手するのである。そこで、割れ窓理論は、地域における秩序違反行為への適切な対応を主張する。縄張意識と当事者意識が高ければ、秩序違反行為が放置されるはずがないからである。

6. ニューアーバニズム

1980年代後半から1990年代にかけて、主に北米で発生したアーバンデザインの動き。

欧州：コンパクトシティ

英国：アーバンビレッジ

背景：郊外化の弊害の顕在化。具体的にはコミュニティの崩壊、行政サービスコストの増加 (低密度なので、ごみの回収作業などのサービスにかかるコストや電灯などの社会インフラなどのコストが高くなる) があげられる。

具体的な方法

- ・ 伝統回帰的な都市計画で鉄道駅を中心に、商業施設や住宅地がその周りを囲んでいるといった都市モデルを想定
- ・ 過度な自動車依存を解消するための、鉄道やバスなど公共交通を基本とした都市構造
- ・ ヒューマンスケールの職住近接型まちづくり
- ・ 基本的には郊外においても都市的な要素を注入する。郊外における開発手法

・アワニー原則 (The Ahwahnee Principles)

1991年秋、カリフォルニア州ヨセミテ国立公園内のホテル アワニー (The Ahwahnee) に地方自治体の幹部が集まった。その会議で発表されたのが“アワニー原則”である。ピーター・カルソープ (Peter Calthorpe) をはじめとする6名の建築家によって起草された。

第二次世界大戦後の米国の都市開発のあり方に疑問を抱いていた彼らは、1980年前後から自分たちの考え方にもとづいて新しい町を建設してきた。

彼らのつくった町は、米国内外で注目を集め、高い評価を得るとともに、開発事業としても成功を収めた。彼らの成功を見て模倣したまちが各地に現われたが、模倣は表面的で、つまみ食い的に行われてしまい、彼らの目的や意図とは異なる不完全なコミュニティが次々と出現した。このような状況を見て自分たちの意図するまちづくりの全体像を明確に提示する必要性を痛感し、6人連名で、まちづくりにおいて遵守すべき諸原則をとりまとめたのが“アワニー原則”である。

米国の抱える社会問題は、コミュニティの崩壊によってもたらされた。コミュニティ崩壊の原因は、自動車に過度に依存したエネルギー大量消費型のまちづくりのなかにある。彼らはその解決策として、自動車への依存を減らし、生態系に配慮し、何よりも人びとが自分の住むコミュニティに強いアイデンティティが持てるような町の創造を提案している。

アワニー原則では、このような町の実現のために遵守すべき事項を、①コミュニティの原則、②コミュニティよりも大きな区域であるリージョン (地域) の原則、③これらの原則を実際に適用するための戦略、に分けて記している。